

六ヶ所人間記は1985年、**夏休みの宿題は終わらない**は1990年公開の記録映画である。両作品共に当時多くのメディアで取り上げられ、全国で上映された。すでに30年以上が経過した。東日本大震災・福島第一原発の大事故後、知人、友人から両作品のリバイバル上映会が要請され、良き機会に幾度か恵まれた。

青森県上北郡六ヶ所村に核燃料サイクル施設立地(原子力発電所から出た使用済み燃料を再処理する施設・ウラン濃縮工場・低レベル放射性廃棄物施設等々)を青森県が正式に受諾した1985年から30年後の2015年秋には都内と青森市で両作品を上映した。今回は異なった日程と会場で小規模な学習上映会を行う。

六ヶ所人間記は青森県上北郡六ヶ所村を1982年から1985年の3年間にわたり訪ね歩いた記録である。現在六ヶ所村には核燃料サイクル施設がある。この施設の計画は国がむつ小川原開発の名目で、隠密に長い時間をかけて農業者の土地を買収した果てに浮上した。むつ小川原開発を巡り村がすでに賛否両論で二分していた当時の村人の生活を取材中の1984年にこの立地案は正式に公表される。六ヶ所村そして青森県民は核燃料サイクル施設立地の受け入れ要請を巡り

六ヶ所人間記（字幕付き）1985年 長編記録映画

16mm モノクロ 2時間51分

1986年度第35回マンハイム国際映画祭(西ドイツ)特別賞受賞・英国エジンバラ映画祭・香港国際映画祭・パリ・シネマ・ド・レエル・フライブルグ国際環境映画祭などに正式出品・日本映画クラブ推薦、制作・構成・インタビュー:倉岡明子、構成・現場録音・編集:山邨伸貴、撮影:小田博、整音:久保田幸雄、編集助手:生田聰、ポスター制作:新居田郁夫☆3年間協力してくれた方達:鈴木志郎康、渡辺公三、若月治、倉岡乾一、山邨玄

各界からの反響 1985年 六ヶ所人間記

日本経済新聞(9月11日)避けえない歴史の流れに身をゆだねる村人の生活と心情を伝える人間味豊かな作品になっている。

毎日新聞(9月12日)「手だれ」の作品にはない新鮮さを持ち、日本の「いま」を静かに訴え、考えさせる点で、映画関係者にも「気になる」作品であろう。

読売新聞(10月28日)高度成長と近代化のツケが、本当に今深刻なかたちで国土を破壊している。その現状をくっきりととらえたすぐれたドキュメンタリーだ。

朝日新聞(10月24日)滞在は5泊6日が限度で。。。この玄ちゃんのリズムに合わせて撮影しなければならなかった。しかしその事は村人のゆったりとした生活のテンポとも重なった。

朝日ジャーナル(11月1日号)玄はスタッフを記録者から村人と同じ生活者へと引きずりおろし、記録する側とされる側という関係の中でできあがる“秩序”を巧みに壊す。素晴らしい「道化」を無意識に演じているのである。

松田政男(公明新聞6月20日)「公」的な撮影対象を記録することが、そのまま撮影主体の「私」的な軌跡ともなりうるとは一種のコペルニクスの転回ではないか。

東京大学新聞(9月24日)「六ヶ所人間記」は開発自体の功罪を問うと共に、その渦中にあって無防備の形で、国家と対峙する他なかった住民の肉声を収録することによって、スタッフ自らその同時代性を担いつつ個人と国家(個と社会)の問題に新たな照射を投げかけるものである。

ブルータス(11月1日号)日本のドキュメンタリーフィルムが近年極めてスリリングで面白い。今回ようやく東京で公開されることになった『六ヶ所人間記』はそんな流れの中で'85年の貴重な収穫として必見の映画であろう。

クロワッサン(10月25日号)20余人の証言には、大きな時代の波に翻弄されながらも、なお、たくましい人間の生命力を感じられる。

土本典昭(さっぽろ映画祭・特別寄稿)つねに商行為に立つTVやプロ根性のものには撮れない映画、まだお目にかかることのない質の映画です。それでいてドキュメンタリーの真を確実に一枚めくって見せてくれました。

西嶋憲男(美術手帖9月号)こういう映画が。映画文化にとってきわめて貴重な意味をもつ実践であることを強調したい。

倉岡明子 プロフィール

1947年青森市生まれ ○最終学歴:上智大学文学部哲学科卒・同大フランス文学科博士課程満期終了・パリ第4大学フランス文学第三課程DEA取得 ○フランス大使館経済部・アテネフランス文化センター(各種文化事業を主宰)勤務後、仏語通訳、日本語・仏語講師業に従事

推進派、反対派に再び二分し、村人の生活は大きく揺れることになる。その是非が問われる中で、六ヶ所村の人々が迫り来る村の変貌をどのように感じ、考えていたのか。じっくり耳を傾けていただきたい。

また英仏の再処理工場周辺に住む人々を取材した**夏休みの宿題は終わらない**は 1988年夏の一ヶ月にわたる旅の記録である。当時仏国ラ・アーグの再処理工場は稼働開始20年以上 英国セラフィールドのそれはすでに40年以上が経過していた。しかし Chernobyl 原発の大事故2年後でもあり周辺住民は力強い反対運動を継続していた。英國では白血病に苦しんだ人々の証言が得られた。

1986年のChernobyl原発大事故、2011.3.11福島第一原発の事故にも拘らず2015年原発の再稼働は開始した。六ヶ所村の再処理工場は巨額が注入されたが技術的な問題を抱え幸いにも未だ稼働していない。もんじゅは廃炉決定されたが 高速炉開発など核燃料サイクルの行方は疑問符をつけたまま進行中である。

誰が何にどのような責任がとられるのか、責任の意識が不在のまま物事が進行している。まずは国策に翻弄される当時の人々に学びたい。

夏休みの宿題は終わらない（字幕付き）1990年

長編記録映画 16mmカラー・キネコ 2時間10分

制作・インタビュー・翻訳:倉岡明子 監督・撮影・編集:山邨伸貴
スチール:山邨玄、ポスター制作:新居田郁夫

☆協力:鈴木志郎康、渡辺公三、高木仁三郎、鈴木真奈美、Mycle Schneider、小田博、林加奈子、西谷秀明、君塚章子

当時、ビデオで撮影されたものは映画祭などへ出品は不可能であったがドキュメンタリー作品でその年の話題作となる。日本映画クラブ推薦

夏休みの宿題は終わらない

1989年

朝日新聞(11月2日)英仏の住民とヒザを交えて話合った体当たりの人間記録だ。

毎日新聞(11月2日)人間の愚かしさを改めて実感させられてしまう映画だった。

東京新聞(11月16日)映画の中に感傷的なコメントはいっさいない。

大下由宮子(デーリー東北12月4日)試写会で、ラストシーンの映像が消えても誰一人席を立てませんでした。言葉がありませんでした。

1990年

日本経済新聞(1月29日)夏休みの駆け足の撮影旅行で3人の心に残ったものは、見る者にも宿題としてなげかけられるのである。

日刊ゲンダイ(2月2日)ひたすら原子力拡大政策キャンペーンを推し進める日本の当局の“安全”キャンペーンもこのフィルムの前ではただむなし。

読売新聞(1月25日)衝撃的な事実が次々と明らかとなり、汚染の実態を克明に捉えた。

松田政男(公明新聞1月25日)なによりも驚かされるのは親子が訪れたフランスのラ・アーグにせよ、またイギリスのセラフィールドにせよ、一言で言い切れれば、死の臭いが立ちこめていることだろう。

鈴木志郎康(イメージ・フォーラム1月号)全編を通して核燃料施設の問題が、生活意識のレベルで語られているわけであるが、その生活のレベルでドキュメンタリーが作られているというところに、この映画のよさがあるといえよう。

クロワッサン(1月25日号)割りきれない重さがこの映画から伝わってくる。

ぴあ(2月21日)見えないところで徐々に侵蝕し続ける核の恐怖を淡々と浮き彫りにしてゆく。

かわなかのぶひろ(調査情報2月号)その内容において、その制作形態において、この作品はドキュメンタリーにとって貴重な一石を投じている。

キリスト新聞(1月1日)青森県六ヶ所村問題などを考えさせる日本人必見のドキュメント映画

○作品歴 自主制作長編記録映画 “東京クロム砂漠”(1978) モノクロバートカラー 1時間47分 制作担当:東京都内にてクロム禍が引き起こした問題を取り材した記録映画(アテネフランセ文化センター映画技術美学講座卒業作品) “六ヶ所人間記”(1982~1985年撮影・1985年公開) 16mm モノクロ 2時間51分 “夏休みの宿題は終わらない”(1988年撮影・1990年公開) 16mm カラー・キネコ 2時間10分 “だからまいにちたたかう”(字幕付き) 2016年春アップリンクにて公開 2014年 長編記録映画 デジタル カラー ブルーレイ 1時間55分 2003年12月—旅人として初めてパレスチナを訪れる衝撃の大地に愕然とする。以来数回にわたり再訪。紛争勃発以来すでに70年を経過後なおパレスチナの人々は人間としての尊厳と自由を奪うイスラエルの占領下にある。またパレスチナの地を追われ未だに難民の生活のままの人々。未来が見えないまま日々が苦しみの鬱いが今も続いている。アラビア語の読み書き習得やパレスチナ問題を学習し10年が経過するが多くの知人友人の協力を得て完成したパレスチナ見聞記